

列王記第二 4章 1~7節

イスラエル連合軍はモアブに入って勝利したのですが、モアブ王が息子を城壁の上で全焼のいけにえにしたことにより、引き返さざるをえなくなりました。イスラエル側からすれば、最後の詰めができなくなってしまったというところですね。そうした記事の後ですが、4章は打って変わってエリシャの働きの事となります。

1. 預言者のともがらの妻の訴え (1節)

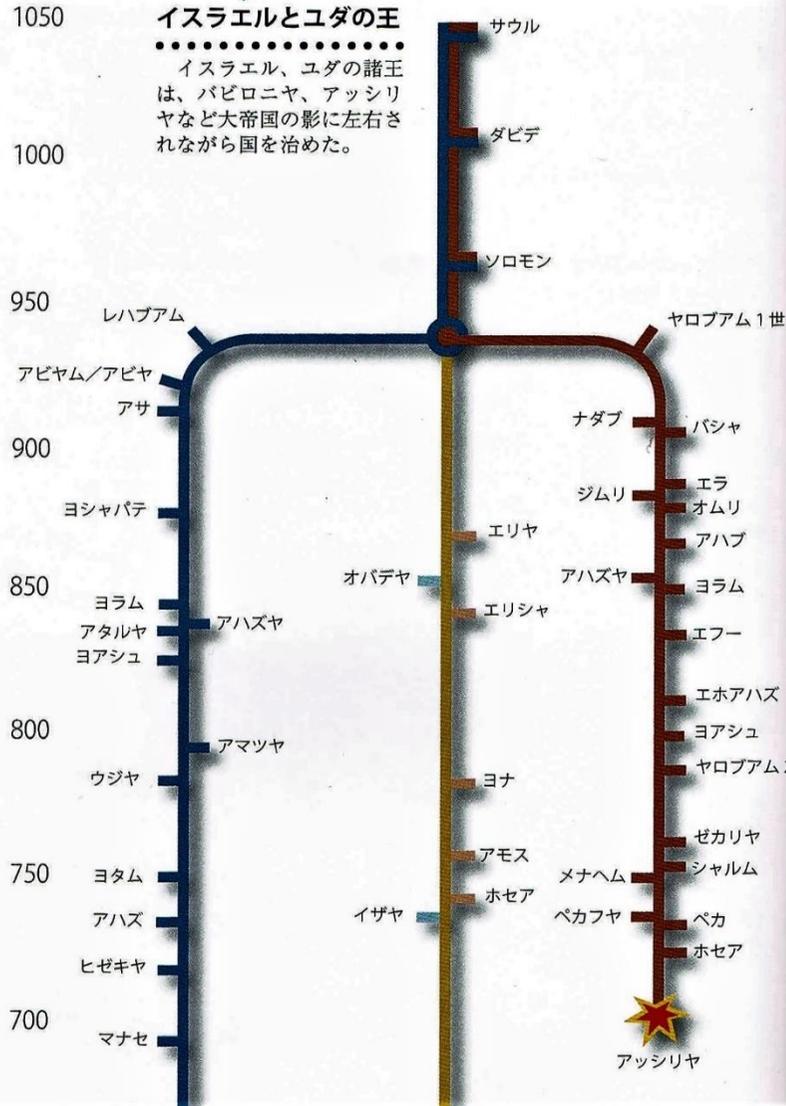
①預言者のともがらの妻 (1)「預言者のともがらの妻のひとりがエリシャに叫んで言った。」預言者仲間のなかの一人の妻がエリシャのところに来て来ました。そして、叫びました。「預言者のともがら」とは、預言者の仲間と訳されたり、預言者学校と訳している場合もあります。ここにあるともがらは、エリシャを中心に形成されていた、信仰一徹の預言者グループでした。偶像信仰と対決する人々でした。エリシャの服装は1章で「毛衣を着て、腰に革帯ししめていた」(8)とありますが、預言者のともがらとその家族も質素だったことなのでしょう。興味深いことは、ここに出てくる預言者は結婚をしていたということです。その妻からの訴えかけです。

②主を恐れた夫が死に (1)「あなたのしもべである私の夫が死にました。ご存知のように、あなたのしもべは、主を恐れておりました。」ここで明らかなのは、「あなた(エリシャ)のしもべ」という言葉からあるように、その人は、エリシャの弟的存在であったということです。その妻の切実な訴えは、預言者の一人である夫が死んだということでした。死因については記されていません。ただ、この人がエリシャの指導のもとに、主をまっすぐに信じ、主を恐れつつ歩んでいたということです。妻から見ても、その信仰は、人間ではなく、「主を恐れる」人でした。

③貸し主が来て (1)「ところが、貸し主が来て、私のふたりの子どもを自分の奴隷にしようとしております。」しかし、信仰の人であった夫の死により、問題が発生したのです。ここに預言者たちも生活者であったことがわかります。何らかの事情で、おそらくは生活のためでしょう。借財があったのです。その貸し主がやって来たのです。その人は温情もなく、返済を求めたのです。もし、それができないのであれば、ふたりの子どもを差し出せというのです。他には何も財がないと思われる妻から取れるものは、子どもたちでした。自分の奴隷にしてこき使おうとしたのです。場合によっては、子どもたちを売り払ってしまうこともできると考えたのでしょう。

2. エリシャのすすめ (2~4節)

①財は何もない (2)「エリシャは彼女に言った。『何をしてあげようか。あなたには、家にどんな物があるか、言いなさい。』彼女は答えた。



『はしための家には何もありません。ただ、油のつぼ一つしかありません。』」預言者エリヤは未亡人の訴えを聞いて、言ったのです。「私が何をしてあげられるだろう。あなたの家にある物を言いなさい。」すると女性は、「私どもの家には何もないのです。ただある物は、油の壺一つです。」

②器を借りて来なさい (3)「すると、彼は言った。『外に出て行って、隣の人みなから、器を借りて来なさい。からの器を。それも一つ二つではいけません。』」すると預言者エリヤは返します。「家の中にそれしかないのなら、外に行き、近所の人々から器を借りて来なさい。空の器ですよ。一つ二つではなく、できるだけ多く借りて来なさい。エリシャのうちに与えられたビジョンがどんなものであったのかは、女にとって全くわかりませんし、想像すらできなかったことでしょう。

③油をつぎなさい (4)「『家に入ったなら、あなたと子どもたちのうしろの戸を閉じなさい。そのすべての器に油をつぎなさい。いっぱいになったものはわきに置きなさい。』」器を借りて家に入ったら、戸をしっかりとしめなさい。そして、家族は家の中に閉じこもりなさい。その上で、そこにある器に次々に油を注いでいきなさい。そして、油が一杯になったものは、脇に置いておきなさい。このように、エリシャから言われたのです。

3. 油によって生きる道を (5~7 節)

①器に油を注ぎ (5)「そこで、彼女は彼のもとから去り、子どもたちといっしょにうしろの戸を閉じ、子どもたちが次々に彼女のところに持ってくる器に油を注いだ。」預言者のともがらの未亡人は、家に帰ると、エリシャに言われた通りにしました。戸を閉め、子どもたちが借りてくる器に油を注いでいったのです。ここには、どのようにして、次々と器に油を供給できたのかについては記されていません。彼女も夢中になっている行っている様子です。油が尽きてしまうなどとは全く考えずに、子供達が器を持ってくれば、そこに油を注いでいったのです。

②もっと器を (6)「器がいっぱいになったので、彼女は子どもに言った。『もっと器を持って来なさい。』子どもが彼女に、『もう器はありません。』と言うと、油は止まった。」どの器にも油が一杯になったので、一人の子どもに言ったのです。「もっと器を持って来なさい」。母親はこれだけの油が目の前にあることに驚きつつ、もっとあれば良いのにとともに思い、そのように言ったのでしょうか。ところが子どもは言いました。「もう器はないです」。このように子どもが言うと、油の供給はとまりました。それが丁度良い量だったのでしょう。

③油を売り (7)「彼女が神の人に知らせに行くと、彼は言った。『行って、その油を売り、あなたの負債を払いなさい。その残りで、あな

たと子どもたちは暮らしていけます。』」彼女はこのことを神の人(エリシャ)に知らせに行きました。一部始終を伝えたのでしょう。すると、彼女に伝えたのです。「さあ、行って、その油を売りなさい。そうすれば、それなりの額になるでしょう。そのお金で、借りていた負債を弁償しなさい。そして、それでもまだお金は残るでしょう。そうしたら、そのお金を用いて、あなたと子どもたちの生活は成り立っていくでしょう」と。それは、愛情と知恵に満ちた導きでした。彼女の心はどれだけ慰めを得、元気を与えられたことでしょうか。

《結論》預言者のともがらは、共同体を形成していたという側面があったようです。しかし、今朝の聖書箇所には、夫婦が何らかの経済的負債を持っていたということは、独立した生活をしてきた面もうかがえます。今回のように夫が死に未亡人が困窮しているときに、エリシャがその困難解決のために全面的な協力をしています。共同体の信頼関係がうかがえます。

この出来事を読んでいると、聖書の三つの話を思い出します。一つは預言者エリヤがシドンのツアレファテに行った時に、ひとりのやもめに接した時のことです(Ⅰ列王17)。彼女は一握りの粉と、壺に少しの油があるだけでした。そこでパンを焼き、息子と二人で食べた後は、死ぬつもりでした。そんな女性にエリヤはパン菓子を作ったら、まず自分のところに持ってくるように言いました。女性は言われた通りにすると、かめの粉と壺の油はなくならなかったのです。主の大いなる恵みでした。

また時代を経て、主イエスはガリラヤのカナで行われた婚礼に参加したのです。その時、共に参加していた母マリヤが、イエスに「ぶどう酒がありません」と言ったのです。主イエスは六つの水がめに水を満たすように、手伝いの者達に言いました。そして、水がめに水が満ちた時、宴会の世話役のところに持っていくように命じました。すると、世話役はそれを味わうと、それはとても良いぶどう酒でした。主イエスの最初の奇跡でした(ヨハネ2章)。いつ水がぶどう酒になったかはわかりませんが、確かに主イエスがそこに証拠としての奇跡を示してくださったのです。(ヨハネの福音書2章)

イエスはまた、多くの群衆が羊飼いのいない羊のようになっているのを見て、深くあわれんでくださいました。そして、弟子達に彼らを養うように言うのですが、とてもできない相談でした。イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで祝福を願います。そして、パンと魚を分けて、配っていったのです。五千人もの人々が十分に食べ、パン切れが12の籠一杯に残るほどでした。(マルコの

福音書6章30節以降)

あえて他の例を詳しく記したのは、共通項と相違点を捜したいからです。共通している第一は、どの場合も欠乏や困難のなかにあるということです。主は、そのような人々に手を指し伸ばしてくださるのです。あなたが弱っているのなら、主の前に出ていきましょう。第二に、主の御手は必要などころには、人間の方法とは全く異なる方法により、無尽蔵に与えられていくということです。主は奇跡的御業を今日でも起こしてくださる可能性があります。期待して祈っていきましょう。第三に、その相違点は、今朝の聖書箇所には主の働き人に関連しているということです。経済的危機にある働き人と未亡人という点です。経済的理由で伝道者になることを踏みとどまってしまう人があるでしょう。「74歳、ないのはお金だけ。あとは全部そろっている」という引退した女性伝道者の証しがあります。壺の中に油を満たしてくださる主は、将来伝道を目指す人への励まし示してくださっています。この国と世界にはで伝道者が必要です(マタイ 9:37)。伝道者が起こされていくように祈っていきましょう。そして、彼らの必要が満たされていきますように。